

チャの輪斑病

1 病原菌の特徴

- (1) チャ輪斑病は、糸状菌(カビ)が原因で起こるチャの代表的な病気で、炭疽病と並ぶチャの重要病害で、ほとんどの茶園に多少とも発生します。
- (2) 摘採・整枝の際に生じた傷口や害虫の食痕から病原菌が侵入して感染します。
- (3) 病原菌は、*Pestalotiopsis theae* (ペスタロチオプシス テアエ)と*Pestalotiopsis longiseta* (ペスタロチオプシス ロングセータ)の2種類があり、*P. theae* は分生子の中央の3細胞がオリーブ色なのに対し、*P. longiseta* は上の2細胞は濃黒褐色、下の1細胞はオリーブ色です。
- (4) *P. theae* は世界的に分布し、樹勢の弱った茶樹に発生しやすいですが、被害はあまり問題になりません。
- (5) *P. longiseta* は主力品種の‘やぶきた’に感染しやすく、著しい症状が特徴です。本県では、1985年に*P. theae* が多く認められましたが、近年では、*P. longiseta* が静岡県、鹿児島県と同様に多く認められます。

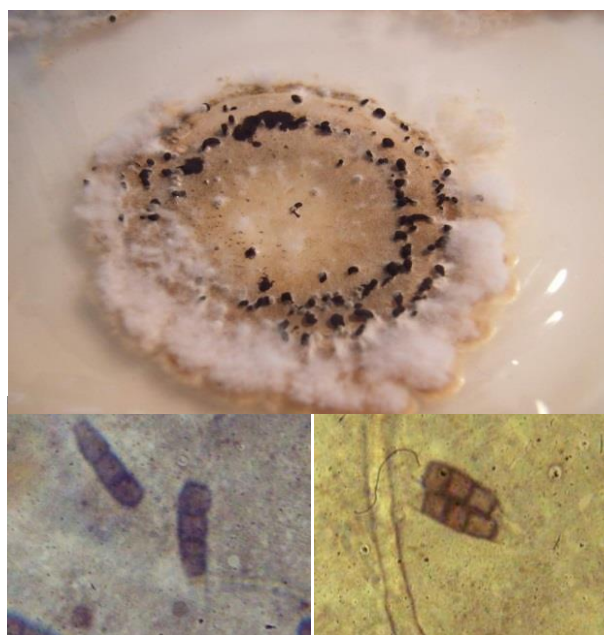


写真1 輪斑病菌の分生子
培養すると輪紋状の紋様が出現する(上)
P. theae(左下)、*P. longiseta*(右下)

2 被害の様子

- (1) 本病の病徴は葉および茎に見られます。葉では濃淡のある褐色の紋様が感染部位を中心に年輪のように同心円状に並びます。病葉は落葉しやすく、発病後 20～30 日で大半が落葉します。一方、摘採による傷口から感染した茎は黒褐色となり枯れます。
- (2) 輪斑病が多発した茶園では、夏秋期に新梢枯死症が発生しやすくなります。新梢枯死症は、摘採や整枝の際に生じる傷口とは関係なく発生する新梢の枯死症状で、夏芽の開葉期に包葉や不完全葉が取れた部位に壊死斑が生じ、約 40 日後の新梢が成熟期に入ったころに、新梢下部が壊死し、上部も萎凋・枯死します。



写真2 新しい典型的な病斑



写真3 葉の中肋をはさんだ古い病斑



写真4 新梢枯死症

3 発生について

(1)発生条件

ア 本病は、主に摘採機によって生じた、葉や茎の傷口から病原菌が侵入して起こります。

イ 病原菌の生育適温は 25～32℃、分生子の発芽適温は 25～30℃です。

ウ 気温が高いほど発生程度も高くなるため、二番茶摘採後に発生が多くなります。

なお、夏期の新葉での潜伏期間は約 7 日です。

エ ‘やぶきた’および‘さやまみどり’は本病に感染しやすい品種です。

(2)発生消長

ア 一番茶摘採・整枝後の6月中

旬以降、発生が見られるように

なります。新梢枯死症状は、8

月中旬以降によく見られます。

イ また、静岡県、鹿児島県では、

本病原菌のストロビルリン系薬

剤耐性菌の発現が問題となっ

ており、本県でも警戒を高めて

いるところです。

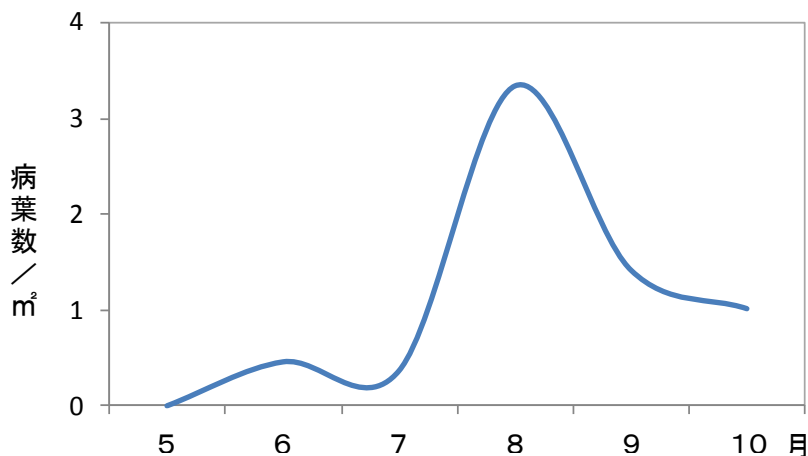


図1 輪斑病(新梢枯死症を含む)の発生推移

4 防除時期と防除方法

(1)耕種的防除

炭疽病の耕種的防除法に準じて、一番茶摘採後や二番茶摘採後の8月上旬までに浅刈りを実施し、伝染源となる病葉を除去します。

(2)薬剤防除

摘採機などによってできた葉や茎の傷口から感染するので、発生園では二番茶摘採(整枝)後、できるだけ早く(当日～1日後)に登録のある薬剤を散布します。

また、新梢枯死症の防除は、夏芽(三番茶)の萌芽期～二葉開葉期に、登録のある薬剤を散布します。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県茶業研究所栽培担当 TEL04-2936-1351

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県